

E—9 育児努力の女子生理におよぼす影響について

山口大教育 森田 俊文

1. 昭和32年秋の本学会で発表した山口県女生徒の生理調査および昨年秋発表の山口県学童の体位と家庭の育児努力に関する調査とを関連づけて比較し、乳児期の育児努力による、山口県女生徒の心身発達加速現象を明らかにしようとしたものである。

2. 調査用紙を用い、県下20高校、3,600人、31中学校4,500人の回答を集計分析した。特に昨年家庭の育児努力と学童の体位の関係を調査した11地区23小学校から進んだ中学生の資料を重視した。

3. 高校生の平均初潮年齢は14年7月が13年7.5月と9年間に約1年早まっております、中学生の既潮率も3年生92%が98%に、2年生63%が90%に、1年生27%が64%に……と1年宛早まっている。特に育児努力の高い小学校から進んだ中学生は初潮の発来が順調である。(相関度 0.76)ばかりでなく、中学生の生理痛(憂うつ不快、腰腹痛等)は9年前に比べて全体では9%もふえているのに、育児努力の高い校区では生理痛を訴えるものが少ない、すなわち普段と変わらぬ者最高46%の中学校から最低21%の中学校までの順位は育児努力の順位と大体一致(相関度 0.77)していることが分かった。